

「保育雑誌」の行方

本誌刊行について
その意図を再考する

本田 和子

「我国教育界刻下の急務は児童研究法の研究なり。願ふに児童学の研究は、現今大いに発達し来りたりといへども、尙未、完成の域に至らず。(中略)されば幼児児童の研究、其材料の精撰、其教育方法の確定、誠に方今我国教育界の急務にあらずや。

(中略)

本会は、もと、幼児保育の方法を研究せんがた



め、同志相集りて設立せるもの、創立以来茲に五年の星霜を経て、爾來漸く隆盛の運に向かはんとす。今回更に規模を拡張し、ここに本誌を発刊して、以て大に当時の急務に向かつて貢献する所あらんとす。是を以て、本誌は一方に於ては児童幼児と共に語り共に歌ひ共に遊びて其師友たらんとを期し他方に於ては、母としての婦人、教育者としての婦人の好伴侶となりて共に児童教育の任

に当り共に高尚神聖なる家庭の快樂を得むことを期し而して現今一般女子教育の發達尙甚だ遅々たるものあるを以て更に此方面に於て滿身の力を尽くして其普及を期せんと欲するものなり。」

ここに掲げたのは、本誌の前身『婦人と子ども』誌の發刊の辞である。明治三十四年一月廿九日と日付の記されたこの一文は、我が国最初の幼児教育誌を刊行し、活字メディアを通じて新しい保育文化を創造しようとする気概と自負に溢れている。現在の私どもにはいささか大仰に感じられるが、これら言葉の端々から滲み出てくるのは、新しい方向を指さしつつ自らの進路にためらいもない、当時の指導者たちの軒高たる心意気ではないか。本誌に流れた歲月に関して、仮初ならぬものと改めての感慨に耽らざるを得ない。

ところで、九十余年を経た今日、本誌は、いま、何を目指し、どこに向かおうとしているのだろうか。

活字メディアの退潮が唱えられて久しい。メッセージを映像に託す試みや、新しいテクノロジーの利用が検討されるなど、情報伝達の世界は、大幅な変革の波に洗われている。確かに、私どもは、かつてのように、本や雑誌だけから情報を得ようとしてはいない。そして、こうした動向は、本誌だけでなく、あるいは単に教育関係の著書や雑誌に限られることなく、すべての活字メディアの發刊に関して、看過し得ない問題を突き付け、改めての解答を要請していると言えよう。その答えとして、雑誌の使命の終焉を告げ、長年の歴史に終止符を打って、休廃刊を宣言したのも少なくない。愛育研究所による『愛育』の發行停止は、感慨深い一つの例と言えよう。

◇ ◇ ◇
『幼児の教育』誌の場合も、久しい以前から自問

自答が繰り返され、同様な結論の検討も続けられている。情報の溢れ返る今日、保育雑誌も十指に余るものが世に出回っている。こんな状況下で、果たして本誌を発刊することの意義が存在し得るのか、否か。

『婦人と子ども』誌発刊の言に掲げられたような、「幼児児童の研究」の責務は学会が負い、「保育材料の精撰」や「教育方法の確定」に関しては、巷間に跳梁する多くの著書・雑誌が、あるいはTVやVTRなどの新しいメディアが、その任を代行することも出来る。何しろ、多くの関連出版社たちは、これら知識・情報の提供に関して、十分過ぎるほどのサービスを怠ることはないだろうから。



しかしながら、創刊当初の本誌が謳ったように、「子どもと共に語り、共に歌い、共に遊ぶ」という

目標は、現代の保育界において、果たして達成されているのだろうか。そして、保育雑誌も保育書も、そのことに関して、何ほどの貢献をなし得ているのだろうか。語ることも歌うこともそして遊ぶことも、それらのすべてを通して子どもらと世界を共有する、ただし、大人としての責任と自覚の上に立って……。こうした理想的な、ただし実現困難な原則は、しかし、現今、益々その意味が強化・確認されている。それどころか、いつか抗いようもない普遍的な理念と化して、保育界全般を覆っているではないか。

現代の本誌の役割は、こうした困難な課題に挑み、その実現に向けて日々努力する保育者を支えることに見いだされる。知識や教材に関する情報や参考意見の提供にもまして、いま、私どもが用意すべきものは、保育者たちの喉を潤すための一掬の清水ではないか。すなわち、その清水によって、子どもとの営みを大らかに享受し得る健やかさと、その困

難に耐える力と、そして、時にはささいな喜びに浸り得る楽天性が、保育する人たちのなかで枯渇しないよう、サービズすることを心がけねばならない。

さらに加えて、もし、多少なりとも啓蒙的な努めを果たさねばならないとするなら、それは、次のような地平で展開されるべきものと考ええる。すなわち、目の前の小さな営みが、実は人と世界の動向に、そして新しい文化の行方に、不十分にかかわりあうことを示唆すること、そして必要ならば、そのための情報・資料・知見などを提示すること。「保育」というミクロ過ぎるほどにミクロな日々の営みと、その向こうに開けるマクロな世界との関連に気付くとき、私どもの課題に取り組む意欲と困難に耐える力とは、より肯定的に増し加わることが期待されるだろうから。

保育雑誌が、実践現場を啓蒙・指導し、あるいは新情報を提供したりする時代は終わったかもしれない。しかし、マラソンレースの沿道に、選手たちのために、「ゴールまで何キロ」と表示し、手の届く所に飲料を用意しておくことが必要なように、保育という営みに従事する重荷を負う人たちのために、マクロな展望と、同時に清らかな飲み水を用意することは、他のメディアにもまして、活字のよくなし得るところではないか。「心を込めて記述されたもの」を「心静かに読む」という行為は、この慌たしい時代だからこそ、送る者と受け取る者との間で、心に反芻可能な味わい深い清水として機能し続けるに相違ないと思うのである。

(お茶の水女子大学)